

「酒田大じしんの次第」（国立歴史民俗博物館蔵）

—文化象潟地震のかわら版—

白石 睦 弥

長谷川 成 一

はじめに

近年、地震をはじめとした歴史災害に関する研究が盛行を見え、多くの著作が発表されている。代表的なものとして、最近刊行された北原糸子編『日本災害史』（吉川弘文館・二〇〇六年）があげられ、同書は当該研究の発展に大きく寄与する成果であった。

本稿では、従来ほとんど知られていなかった地震史料を紹介して、近世後期の出羽国に甚大な被害を与えた文化元（一八〇四）年の象潟地震に関して新たな知見を加えることにしたい。翻刻文は本稿末に掲げ、表紙の写真も形態を把握するのに資すると考え、国立歴史民俗博物館の許可を得て掲げた。

一、史料の概要

「酒田大じしんの次第」と題された本史料は、国立歴史民俗博物館の所蔵にかかり、摺物として制作された所謂かわら版である。題目の刷ら

れた表紙【図1】を含めて、袋綴五丁の分量で、多くが一枚物で構成されているかわら版の中では少々珍しい形態である。表紙には版元と推定される「板本新六」の名が記されており、そのほかにも印刷ではない後筆の文言が見える。

表紙を開いた初めのページ（二丁目）には、ルビが細かく付されているが、訂正などの書き込みがなされており、ルビ自体にも多少の読み違いが見られる。後掲の翻刻文中のルビは史料表記に従い、そのまま翻刻した。史料中には変体仮名も多いが、筆者は適宜これを平仮名に改め、読点を付すこととし、校訂に際しては概ね『新青森市史』編纂の校訂要領に従った。

本史料の「酒田大じしん」とは、発生日に鑑みると文化元年の出羽国象潟地震のことであるが、内容の大半は象潟（現秋田県仁賀保市）ではなく、酒田町（山形県酒田市）の被害状況を克明に記録している。そのため「酒田大じしんの次第（傍点著者）」と題されたものであろう。以下、同地震を文化象潟地震と称し、簡単に触れておくこととする。

二、文化象潟地震

象潟は松尾芭蕉^①が『奥の細道』の中で「松島は笑うが如く、象潟はうらむが如し」と日本三景の一つ松島とならべ評した景勝地である。「伊能図」をはじめとした多くの絵図類にもその存在を確認することができ、また絵画や屏風などにその美しい姿を描かれることも多かった。しかし、文化元年六月四日（一八〇四年七月十日）夜四ツ時（午後十時頃）に発生した直下型の大地震は、浅い湖に多くの小島が浮かぶその優美な景観を一瞬にして破壊した。この地震によって浅い湖であった象潟は一八〇センチメートル以上も隆起したと推定されており、たたえていた湖水は流出し泥沼と化したのである。その後、象潟蛸満寺の和尚覚林が景観保存をめぐり領主の六郷氏と対峙し、象潟は現在にその名勝としての面影を残すこととなった^②。

この地震では北は松前まで有感であったらしく、松前藩の『松前蝦夷記』^③には「先年羽州秋田能代湊大地震之時（中略）少々ゆり申候由」とあり、地震の少ない蝦夷地では珍しいことと記されている。また弘前藩の官撰史書「封内事実苑」^④には「昨夜強地震致、夫より今日（六月五日、筆者註）迄時々地震」のように本震だけでなく余震についても記録している。南は越後・佐渡まで揺れた事が『佐渡国略記』などから確認でき、（六月）四日、夜四時過地震、越後筋所々損所有之、別而羽州象潟大痛、蛸満寺等破壊之由^⑤と見える。象潟のある「塩越村」（現秋田県仁賀保市）の被害は、潰家三八九棟・死者六九人という壊滅的なものであ

った。被害の概要については、「表1」をご覧ください。

宇佐美龍夫氏は、当該地震の震源を鳥海山と遊左・吹浦の中央あたりにあると推定している^⑥。一方、萩原尊礼氏によれば、土地の隆起分布や津波の波高分布などの調査により、推定震央は象潟付近の海底と考えられており^⑦、ほとんど象潟直下型の地震であった。マグニチュードは六・九〜七・一と推定されている。

なお、象潟を中心とした地域で歴史時代に発生したと考えられる地震は近世以降のものだけでも数度あり^⑧、それらを区別する意味で当地震を文化象潟地震と表記した。

三、史料の内容について

本節では、本史料により文化象潟地震の諸相について見ていきたい。特に断らない限りは「酒田大じしんの次第」を典拠としている。

さて、地震発生の日時は「文化元子六月四日夜四ツ過」とあり、他の多くの史料と同時であるが、「俄」に地震が発生したという記述は前震があつたとする史料などと比較すると、少々異なっている。また、近世期の多くの史料では、この地震が当時噴煙をあげていた鳥海山によるものであるとその関連性が記されており、本史料でも「海ヶ山」の地が鳴り響き、地震が発生したとしている。しかし、現在ではこのような火山性の地震であるという考え方は否定されている^⑨。

地震発生時の様子はさほど具体的ではなく、老若男女が泣き叫ぶ様子など、その惨状を記している。地震後、崩れた家々から出火し酒田町の

青戸小路・片町など三〇〇軒余が一日にして焼け上がったという。

「七八間の山」が酒田の城内（亀ヶ崎城カ）に出現し、橋や土蔵も全て痛み、地割れからは水が噴き出すなど城内の被害も大きく、寺々でも寺門や御堂などの建物が痛んだり崩れたりし、やはり水が噴出している。「いなり山」などの山々も崩れ、町々は「内町・新片町・つきぬき・八間町・青戸小路・米屋町・浜の町・舟場町・かしはた通り・秋田町・六間小路」などで一五〇〇軒が潰れ、一軒たりとも被害を受けない家はなかったという。土蔵は三三七ヶ所が痛み、三五九人が死亡した。前述の塩越での被害については「塩越の町、死人五百四人有之」と記されている。

余震は本震後八〇日間で「七十八日」発生し、そのうち大きな余震は「十五日」程度と記されている。酒田町中では六月十日の夜までは家を開放して外に小屋がけをして過ごしていたらしく、これは多くの災害特に地震に際して見られる対応策の一つで、現在の避難所生活といったところであろうか。余震が打ち続く中で崩れかけた家屋の中で生活するよりは、外に小屋をかけた方が安全と言えるし、象潟地震は夏場に発生したため、戸外での生活は気候的にさほど厳しくなかったはずである。

本史料で注目される事象に、「ひび」と記された地割れ現象が挙げられよう。繰り返し、地割れとそれに飲み込まれた人や水の噴出などについて記されており、当時の人々にとって足元の地面が揺れることやひび割れが生じることは、心理的にも物理的にも大きなダメージを与える現象だったに違いない。また、多くの場所でのこのような地割れから水や泥などを噴出しているのが文化象潟地震の一つの特徴でもあった。町々の

井戸からは砂や泥が吹き上げ、その高さは壱丈五尺（約四・五メートル）にも及んだという。

地変に関しては、先述の象潟湖の隆起現象の他に、鶴岡街道でも海岸から三四里（九〜一二キロメートル）離れた場所で貝まじりの「ざり（砂利カ）」が見られ、不思議なことだと記されている。さらに、吹き上げた砂からは「いわう（硫黄、筆者註）」の匂いがしていたとされ、七年前に鳥海山が噴火した際に噴出した砂と同じもので、前兆現象として「ごとくく」という音がすると地震が発生するとしている。

また、被害にあった人々の中でも注目すべきは、秋田の女性二人が抜け参りの帰りに象潟の塩越に宿泊していることである。伊勢などへの参宮は当時の女性が旅行をする格好の理由であり、参宮を目的としてはいるものの物見遊山の色彩が濃い旅となることも多かった。二人は秋田までの帰り道ついでに、北国街道沿いの景勝地象潟を見物しようと考えたのではなかろうか。運悪く震災に遭遇し、彼女らは宿の梁が落下し敷居に挟まれてそのまま「うみへと引れ」て行ってしまったという。旅人が亡くなったという話は他の史料でも確認することができ、特に「参宮下向」の際に塩越（象潟）を訪れる旅人は珍しくなかったようだ。他にも家族の救出がうまくいかず、共々に死亡してしまった様子や、折角戸外へ避難しても地割れにつかまって亡くなった者の話なども、やや教訓めいたニュアンスで記されている。

おわりに

本稿で紹介した「酒田大じしんの次第」は、文化象潟地震のかわら版であり、不特定多数の人々に読まれることを期待して作成したものである。したがって脚色や誇張があるのは当然のこととして、また、被害や余震の数値などについても疑問が残るものの、当時の人々が災害に際してどのような情報を共有しようとしていたのか、また彼らの災害観についても知ることのできる貴重な史料といえよう。

前兆現象などから見える地震予知の知識や、被害情報の流布など、さらに避難に際しての教訓めいた記述は、現在の防災や減災に対する心構えにも共通するものがあるように思われる。今後、本史料が文化象潟地震の災害像を検討する素材として、有効に活用されることを期待している。

註

- (1) 松尾芭蕉（一六四四～九四）江戸前期の俳人。紀行文『奥の細道』には「象潟や雨に西施が合歓の花」の句が収められている。なお、『奥の細道』は『日本古典文学大系四六 芭蕉文集』（岩波書店・一九五六年）所収。
- (2) 長谷川成一『失われた景観 名所が語る江戸時代』（吉川弘文館・一九九六年）。
- (3) 『松前町史』史料編一（松前町・一九七四年）所収。
- (4) 弘前市立弘前図書館蔵津軽家文書。目録に示されるタイトルは「封内

事実秘苑」であるが、本文中では史料表記に従った。

- (5) 東京大学地震研究所『新収 日本地震史料』第四卷（日本電気協会・一九八四年）二七六頁。
- (6) 宇佐美龍夫『新編 日本被害地震総覧「増補改訂版」』（東京大学出版会・一九九六年）九七～九九頁。
- (7) 萩原尊礼編『続古地震』（東京大学出版会・一九八九年）五二頁。
- (8) 文化元（一八〇四）年の文化象潟地震の他にも、寛永二十一（一六四四）年九月十八日、天保四（一八三三）年十月二十六日、明治二十四（一八九四）年十月二十二日などに地震が発生している。前掲註（6）の宇佐美『新編 日本被害地震総覧「増補改訂版」』に依る。
- (9) 長谷川成一「歴史の中の地震その四 象潟地震（一八〇四年）風光明媚な景観が一瞬のうちに崩壊」『SEISMO』第八巻四号（通巻八七号）二〇〇四年）本稿はその他の部分についても、多くをこの論稿に依っている。また、この論稿には本史料についても触れられている。

(表紙)

酒田大じしんの次第

(後巻) (元)
「板本 新六」

文化元子六月四日夜四ツ過、俄海ヶ山か地鳴ひゞき、それより大じしん
ゆ(り脱力)来りて、其すさまじき事、寺々家土蔵崩れ、又町々ろ
うにやくなんによなきさけぶこい地ひゞく、又間もなくゆり返り、酒田中
こゝハ命終ぞと板戸ほす木角ものほし取合其上に居ミな一同にな
きさけぶ間もなく崩る家より出火おこり、青戸小路・片町一円ニや
け上り、じしんたへる間なくゆり候へば、たゞやけ次第也、又家主もと
ほうにくれ小浜・吹うら・小砂川三百軒余やける也、其火事のうち、

(行間に次の文あり、後巻)

「弥五兵衛

定書

助五郎

酒田大地震」

かせなく御城代・御役所・町奉行、御家中合て廿七けんくつれ候、御
城之内へ、七八間の山出たり、大はしやふれ重り、七ツ土蔵ミないたミ
大橋のまひに一文計のわれ水をふきいたす事大川のことし、寺々にて
ハ本経寺二尺余りしつミ、大信寺二尺五寸うき上り、経堂いたミ、

御門くつれ、安浄寺かり御堂くつれ、御材木小やつふれ、かねつきとう
かひり、其地より水わきいて、たきのこつくなかれ、じゆうふく寺門い
たみ、石ばしくつれ、孝称寺御とうしつミたる、

(二巻)

寺町御門より二丁余有之所三尺通り真直に三尺計りうき、下を大地なり
共通り候様にひびわれ、林称寺どそう作、大くつれ、妙法寺御堂いたま
す、御門二ツ共二崩れ、蔵言寺いたミ、海安寺ねしやかどうくつれ、山
王どういたミ、神明山くつれ、いなり山ひゞわれ崩れ、町々ハ内町・新
片町つきぬき、八間町・青戸小路・米屋町・浜の町・舟場町・かしはた
通り・秋田町・六間小路、家数千五百計つぶれ、其外家々壁崩れ、なけ
しはづれ、板戸はミじんとなり、一軒成とも万ぞくの家なし、又土蔵の
いたミ三千三百五十七ヶ所、死人三百五十九人、其外て足をひしぎ、こ
しをうち、尻をうたれ候者かずしれず、又川北ゆさわの分、死人何ほど
と云ことしれず、田地本田少し残り、新田の分苗代のこつく、みや門外
の村百五十軒余り有之候所、一軒もくづれさる家なし、死人五十老人、
馬廿七疋、寺三ヶ寺是に応すへし、舟場町家片付段、くやんわん二よら
す、尋候へハ一向見へす、ひゞより地へ引入たりと見へ候、又舟場町真
中へ八尺計のひゞ出、川のことし、

(三巻)

泥水ながれ、又町々井戸より砂どろを吹上候事壹丈五尺よ、立よる者め
はなへ砂どろ入候而立待相果候様二成候、ひゞより泥を吹き出し候事の
きはもとまで上、其内にゆる氣有、大宮と申つるがおかかいどうにほと
ぎり有、立より見れば貝まじりものざり也、いそはた迄ハ三・四里計有、

ふしぎの事共也、井戸地あらまし悪くなり、おけかわ吹上候処も有之也、又本庄領に塩越と申、酒たより十二り有、家数六百計有、じしんニ付三軒残惣つふれ、海引出して家も有、かんまん寺^{キヤカク}、^{ムツヤ}共底しづミ見へなく成り、象潟^{キヤカク}からほりと成、四十八かた名所平地となり候、かんまん寺おしやう、やくそう・うんすい、納所・下男ニ至る迄行方今にしれざる也、塩越の町死人五百四人、こゝニ秋田の女二人拔さんぐうの下向ニ此所へ宿付、夜のぢしんニうるたき、うら口より逃出んとうろつく内、上よりはりをち、しきぬニはさまれ、大こい上てのうのうたすけ給へといふうちニ、家ハうミへと引れ行、むざんなることとも也、酒田ニよらず、夫ハ女房引出しともに死する者モ有、親ヲ出し子を出し、ひゞニはさまれ三人共ニ死するも有、妻子こわきニはさみ

* 四丁の上欄に「南沢」の文言あり

〔四〕

いづる処ニ、家つふれ三人死たる者も有、又父母さいしをいだし我の死たる者あまた有、内ハよう出たれと、ひゞに入て死も有、あわれといふもおろかなり、さかた町中六月四日の夜より同十日迄ハ町中へ小やをかけ、家明はなして外にねてゐる事はかくしき事也、吹上し砂いわうの匂ひいたし也、これ正しく鳥海山七ヶ年いぜんより今にやける所の砂吹出すと見得たり、ごとくくといふことおそろしき音也、其音するとじしんと成也、地しん数ハ、十日まで二十七八ど、其内大ししんハ十五ど也、六日迄ハ透間なくゆる也、本庄あらまいたしミ、亀田ハ少し、川南高声浦あらましつふれ、黒森泊の浜十里余^カミなつふれ、舟一そういつくへ行よりつな切、沖へ吹出され、いまだしれず、かもにて八十二そう大せんいたミ申と咄候、



図1 「酒田大じんの次第」表紙
(国立歴史民俗博物館蔵)

(しらいし・むつみ 弘前大学大学院人文社会科学研究所修士課程)
(はせがわ・せいいち 弘前大学人文学部・大学院地域社会研究科教授)

	戸数	家			蔵			稲蔵・小屋	寺 社		死	傷	死馬	傷馬	備考
		潰	半	破	潰	半	破		潰	痛					
矢島領	36	25			4		73	8							御家中損有り、前郷濁川潰12-13、田畑山裂崩、川を塞ぐ役所潰3、破8、櫓大破6、石垣・塀崩 ※含社家
本荘領・武家	33	—	112		3	2									
〃・民	2,041	133	823		169	328		※21	※22	163	143	95	5		
(内町方)	152	190													
庄内藩町民侍*	413 2,826 40	424		痛144	182 393		9	※ 100	26	150		142		※含社家 ※含番所	
城下	380		424		178	383		11	2	10				地割・噴砂・流水あり、地割れに入り死あり	
遊佐荒瀬平田	1,493 945 471		583 438 491	105 43 6	69 85 59	112 120 60	27 77 101	44 19 7	53 30 25	110 26 6	75 15 22	138 9 1	29 1 2	田畑損1.5万石	
石辻組 遊佐郷の 宮内組	350 547		74 焼1 370	22 23	23 13	24 22	13 1	15 14	13 20	16 50	11 12	15 50	8 6	遊佐郷 役所潰4	
吹浦	96	内焼11	32	1				29	27	43	47	84	14	神宮寺本堂大破	
女鹿	2		45							6*		3*		※含滝の浦島崎	
小砂川	60	焼20								7	多	20			
関	65	44	22			13	15			10		3			
金浦		100	86	焼1	6	31	35			12	35	3			
象潟	512	389	33		127	1	200		18	74	33	4	4	増万寺埋、1.8m隆起	
北家		6-7												秋田あるいは角館	
南家			長屋破損											秋田あるいは湯沢	
計	5,393	772	1,079	358	2	794		121	52	313	143			重複を除いた和で最小を示す。表の総計ではない。	

表 1 文化象潟地震被害一覧〔新編日本被害地震総覧〔増補改訂版〕〕98頁から引用)